5　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。〈鹿児島大〉　二〇一六年度出題

　わたしたちには、生きるうえでどうしても削除できないいとなみが少なからずある。出産、つまり種の再生産がそうだし、日々の食（食材の調達と調理）と（の処理）、つまり個の再生産がそうだ。生まれた子どもを養育し、教育すること、これも省きようのないことだ。病気になったときに治療し看病すること、高齢者を介護し、のあるひとたちを介助すること、ともに生きえてゆくうえで外せないことだ。そしてり、見送り。これら生老病死にじかにかかわることだけではない。防災に防犯。そして住民たちのあいだのもめ事の解決、これらもまた、共同生活のなかでどうしても削除できないいとなみだ。これらすべてを、わたしたちは長らく家族ならびに近隣のひとたちとともに、相互ケアというかたちで担ってきた。出産も近所に助産婦さんがいて、自宅で家族が手伝って出産していたし、食材の調達も地産地消でやってきた。排泄物処理は農家と①レンケイして、治療もたいていはそれなりの応急処置のを体得し、煎じ薬をませたり、体のツボを押したりして、とりあえずしのぐ知恵をもっていた。看取りも遺体のも、葬儀ももめ事解決も、防火対策（防火用水、「火の用心」）も交替で任についた。

　ところが、明治期よりこの国が「近代化」されてゆく過程で、西洋列強に一気に追いつくために国力の増強が最大の課題とされ、議会の設置やさまざまの行政機関の制度化や、「富国強兵」「殖産興業」とならんで、国民の知力、体力の向上という課題を国家が一身に担うことになった。生活の質を上げるために、Ａ国家が国力の基礎である国民の《いのちの世話》をシステマティックに担うことをはじめたのである。出産、治療、看護、死亡認定については、病院を建設し、医療関係の専門学校で教育を受け、国家資格を取得した医師、看護師、放射線技師というプロフェッショナルに一括してあたらせることにした。排泄物処理については、地方自治体が下水道を設置して処理することで衛生度を高めることにした。教育に関しては、師範学校において教師を国家免許をもったプロとして養成した。都市の安全であれば消防士や警察官の養成。もめ事解決には公正な調停、②チュウサイにあたる法曹のプロを養成する、などなど。

　このように社会の近代化は、《いのちの世話》のプロフェッショナルを国家が養成し、国民はその専門職たちにじぶんたちがやってきた《いのちの世話》を委託する代わりに税金やサービス料を支払うという仕組みを築いていった。このことによって、不治の病は減り、世界でも最速で長寿化をなしとげた。まちは衛生的になり、治安もよくなって、夜一人で歩いていても危険を感じないでいられるくらい安全になった。調停もより公正なものになっていった。じっさい鉄道の運行はきわめて正確だし、郵便の遅配も停電もめったにない国になった。安心、安全、衛生、快適、便利なまち、つまりクオリティとアメニティの高い都市生活ができ上がっていった。

　こういう仕組みが完備してゆくことで、市民生活において逆にクオリティを大きく損なったものがある。いうまでもなく、《いのちの世話》を自力でおこなう能力の喪失である。いまこの国で、赤ちゃんを取り上げる腕前をもつひとは専門職を除きほぼゼロである。遺体の清拭や死化粧をするひと、できるひともほぼゼロである。調理において魚をけるひとも、家人の病や傷の応急手当てができるひとも③カクダンに減った。子どもの具合が悪ければ、応急の処置を施さずにまっさきに病院へ連れてゆくことになった。ましてや災害時の排泄物の処理方法、雨水を飲料水に変える方法を知っているひとはほとんどいない。災害で食材の流通が止まったときも、じぶんたちで工夫して野山の植物を調理するのではなく、配給を待つだけだ。

　以瀬戸内寂聴さんと講演会場の楽屋でお話ししているとき、ふと、むかしの庶民の家にあっていまはないものに話が及んだ。で、とっさに浮かんだのが、わたしは救急箱、お相手は大工箱、この二つだった。わたしが子どもの頃は、どの家にも厚紙で作った引き出し付きの救急箱が押し入れにあって、富山の商人から買い受けた薬がぎゅうぎゅう詰めに入っていた。半年後か一年後にはおなじ行商人がまた、補充にやってきた。傷、肩こり、発熱、風邪、頭痛、歯痛、腰痛、腹痛、下痢、水虫……なんでもござれの箱だった。「」とか「」、「赤チン」、「ヨーチン」の香りの記憶は、どぶの臭いのそれとともに、いまも体の奥底にんでいる。現在はどうだろう。④ゲネツ剤や、頭痛、肩こり、生理痛用の常備薬は台所の引き出しに入っているが、「病気」と名のつきそうなものは、家でまずは手当てを、とはだれも考えず、すぐに医院に駆け込むなり、タクシーを呼んで病院に走る。

　大工箱にはや、やや小刀がい入っていた。薬が効能の見えないちょっと怖いものであったのに対して、大工道具は見た目には物騒だが、これを使いこなせないと大人になれないといった、ちょっとまぶしいものであった。で研いだり、紙やすりで磨いたりして道具を手入れするということが、一人前になる条件のように子ども心におもわれた。だから、チャンバラ用の刀とか、水遊びをするときの模型の船とかを、鋸や鉋を使って作ったものだった。そのなかで物への道具の当て方を体でえていった。そのような工作を子どもがしている姿を、いまはもう見かけることはない。

　ちょっと大げさな言い方になってしまいそうだが、身体環境を整えるという課題が、その頃はまだひとびとの手の内にあった。料理はもちろん、服を作ることも、家を修理することも、子どものしつけや教育、病気の手当ても、ゴミや排泄物の処理も、近所でのいを収めることも、みなじぶんたちの手でした。そして、まるでその総仕上げかシミュレーションのようなものとして、地域の行事や祭事があった。そして子どもたちにも、いずれそれを担ってもらわねばならないという理由で、幼いうちから年齢に応じてそれなりの役をあてがった。

　高度成長期から高度消費社会への移行のなかで、それら日常生活でかならずこなさなければならないことが、行政の公共サービスや企業によるサービス業務にとって代わられるようになった。みずから体で憶え、果たすのでなく、サービスを選ぶのがわたしたちのいとなみとなった。金はかかるが〝楽になった〟のである。そしてちょうどそのぶん、わたしたちは無能力になっていった。世代から世代へ、《いのちの世話》の知恵とわざを伝える義務を免除されてきたその代価として、わたしたちは《いのちの世話》をみずからの手でおこなう能力を失った。Ｂ「大人」と「子ども」の区別がつかなくなったのである。

　では、トラブルが起こったとき、サービスが劣化したときにわたしたちにできることは何か。皮肉にも行政やサービス企業の担当者にクレームをつけることだけなのである。税金はちゃんと納めている、サービス料はきちんと支払っている、わたしたちの側に落ち度はない、だからサービスが停止したり劣化したりすればそれはサービスを提供する側の責任だ、というわけである。クレーマーは特別なひとたちではなく、わたしたちは潜在的にみなクレーマーでしかいられないのである。クレーマーは口汚くののしるが、それは見た目とは違い、まったく受け身の要求をしている。サービス・システムに対して、「われわれがもっと安心してぶら下がっていられるようにしてくれないと困る」と文句をつけるだけなのだから。

　成熟した市民であれば、ここでクレームをつけると同時に、「そんなやり方ではだめだ。たとえばこういうやり方もあるはずだ」というふうに対案を示す。そのやり方にあきれ果てたら、「もうあなたたちにはまかせられない。少々リスクはあってもこれからはじぶんたちで、地域でやるから、そのぶんの負担金は引き上げる」というふうに、サービス業務そのものをじぶんたちの手に引き戻す。

　じぶんたちが生き延びるために絶対に削除できない《いのちの世話》を、行政や企業に全面的に譲り渡さないこと。この気概と仕組みをわたしたちは長らく放棄したままであった。そのことのつけがＣこうした市民生活の未熟さ、ないしは劣化をもたらした。わたしたちはいのちをシステムにあずけすぎてきたのである。このあずけすぎというのがどういうことかについて、かが『日本の思想』のなかで次のように指摘していた――

日本における統一国家の形成と資本の本源的蓄積の強行が、国際的圧力に急速に対処し「国におとらぬ国」になすために驚くべき超速度で行われ、それがそのまま息つく暇もない近代化――末端の行政村に至るまでの官僚制支配の貫徹と、軽工業及び巨大軍需工業を機軸とする産業革命の遂行――にひきつがれていったことはのべるまでもないが、その社会的秘密の一つは、自主的特権に依拠する封建的＝身分的中間勢力の抵抗のさであった。明治政府が帝国議会開設にさきだって華族制度をあらためて創設（作られた貴族制というのは本来形容矛盾である）しなければならなかった皮肉からも、ヨーロッパに見られたような社会的栄誉をになうな貴族的伝統や、自治都市、特権、不入権をもつ寺院など、国家権力にたいする社会的なバリケードがいかに本来であったかがわかる。（中略）「立身出世」の社会的流動性がきわめて早期に成立したのはそのためである。政治・経済・文化あらゆる面で近代日本は成り上り社会であり（支配層自身が多く成り上りで構成されていた）、民主化を伴わぬ「大衆化」現象もテクノロジーの普及とともに比較的早くから顕著になった。

　わたしたちの生活が行き届いたサービス・システムの恩恵をこうむるなかで、「主」たる市民が「顧客」という受け身で無能力な存在に成り下がっている。こういう苦々しい事実には、個人と国家のあいだ、つまりは地域社会や職業社会といった中間集団の空洞化という事態が深く関連していると、丸山はいうのである。たとえば、家族、地域社会、会社、労働組合。小さな個人と巨大な社会システムとのあいだで、いわばとして、あるいはクッションとして、機能してきたそういう中間集が、この国でも、まるで乾いたスポンジのように空洞化してきたことは、だれもの実感としてある。個人をる被膜が破けて、あるいは薄くなって、個人が社会のシステムにむきだしでつながるほかなくなってきた。

　子どもたちは消費者としてもはや家族という検問所なしに、流通システムにじかにつながるようになっている。あるいは、出産から子育て、排泄物処理、医療、介護、葬送、防災、もめ事解決といった、かつて地域社会で住民が共同で担ってきた生活のベーシックな活動も、いまは行政やサービス企業が一手に引き受け、住民はそれぞれに税金もしくはサービス料を支払うというかたちでそれら巨大システムにぶら下がるだけになっている。さらに労働の形態もそう。現在では勤務というかたちで仕事に就いているひとが九割近くになっている。　⑤エンカクの場所へと通勤し、デスクに向かって仕事をする「勤務」へと、仕事のかたちが画一化してきた。

　個人がこのように社会システムに、中間集団を媒介とせずにじかにつながるようになるというのは、諸個人がおなじ一つの物差しで動くということである。ここにはルールはあっても文化はない。というか、ぎりぎりにまで刈り込まれたルールという文化しかない。かつては商いにも多様な文化があった。損をしてでもしなければならないこと、自組織のためではなくのためにどうしてもしなければならないことをわきまえていた。会社は貧弱な福祉政策を穴埋めしていた。そういう中間集団のなかでは、構成員それぞれに、いってみれば「務め」があって、それがある以上、ひとは「じぶんがここにあることの理由」をみずからに強迫的に問いたださなくてすんでいた。Ｄそういう緩衝地帯が貧相になって、逆にグローバル化の名とともに、あからさまな弱肉強食のゲームにひとびとはむきだしでされるようになっている。

（『しんがりの思想　反リーダーシップ論』による。

ただし、原文を一部改めた）

（注１）　瀬戸内寂聴……日本の小説家（一九二二～）。

（注２）　丸山眞男……日本の政治思想学者（一九一四～一九九六）。『日本の思想』は一九六一年の著書。

（注３）　とつ国……外国のこと。

（注４）　ギルド……中世ヨーロッパの同業者組合。ギルドは特権集団として、政治的、経済的実権を把握していた。

（注５）　蝶番……開き戸やふたなどを開閉するためにつける金具。

（注６）　紐帯……二つのものを結びつけるもの。

問１　傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直せ。

問２　傍線部Ａ「国家が国力の基礎である国民の《いのちの世話》をシステマティックに担う」とあるが、それはどういうことか。「《いのちの世話》」の内容を明らかにして七〇字以内で説明せよ。

問３　傍線部Ｂ「『大人』と『子ども』の区別がつかなくなったのである」とあるが、なぜ「大人」と「子ども」の区別がつかなくなったのか。八〇字以内で説明せよ。

問４　傍線部Ｃ「こうした市民生活の未熟さ、ないしは劣化をもたらした」とあるが、それはどういうことか。八〇字以内で説明せよ。

◎問５　傍線部Ｄ「そういう緩衝地帯が貧相になって、逆にグローバル化の名とともに、あからさまな弱肉強食のゲームにひとびとはむきだしで曝されるようになっている」とあるが、それはどういうことか。本文中の「中間集団」「空洞化」という語を用いて、一五〇字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝連携　②＝仲裁　③＝格段　④＝解熱　⑤＝遠隔

問２　Ａ国民が相互扶助で行ってきた生老病死の世話、安全、もめ事解決などを、Ｂ国家が専門家を養成して専用施設で代行し、Ｃ国民は税を払い委託するということ。（７０字）

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４〔《いのちの世話》の内容説明は同意の内容であれば可。〕

Ｂ＝３〔「国家による専門家の養成と施設建設」という内容であれば可。〕

Ｃ＝３〔「国民が税金を支払って委託する」という内容であれば可。〕

問３　Ａかつて《いのちの世話》の知恵とわざは大人から子どもへと伝えられていたが、Ｂ行政の公共サービスや企業によるサービス業務にとって代わられ、Ｃ大人がその能力を失ったから。（８０字）

Ａ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝４／Ｂ＝３

Ｃ＝３〔「大人が《いのちの世話》の知恵とわざを継承できなくなった」という内容であれば可。〕

問４　Ａ市民は生活を支える営みを行政や企業に任せてきた結果、Ｂ主体的に取り組む姿勢をなくし、Ｃクレームをつけるだけの受け身で無能力な存在に成り下がってしまったということ。（７９字）

Ｃがなければ全体０。／Ａ＝４

Ｂ＝３〔「自力で担う姿勢の喪失」という内容であれば可。〕

Ｃ＝３〔「受け身で無能力」という表現は必須。〕

問５　Ａ高度成長期から高度消費社会への移行とともに社会がグローバル化することで、Ｂそれまで個人と社会システムとのあいだでクッションとして機能してきた地域社会や職業社会といった中間集団の紐帯が空洞化し、Ｃ個人がじかに巨大な社会システムの激烈な市場経済の中で、勝ち負けと損得を競い、神経をすり減らしているということ。（１５０字）

Ｂ・Ｃの内容がなければ全体０。／Ａ＝２

Ｂ＝４〔「地域社会や職業社会が個人と社会システムとのあいだに介在して、個人を守ってきた」という内容であれば可。〕

Ｃ＝４〔「個人が社会システムとじかにつながり、市場経済の競争社会に投げ込まれるようになった」という内容であれば可。〕